⑪徳川家康書状

［天正一二年（一五八四）　木作左衛門佐（木造具政）・戸木入道　宛］

信雄江御注進状、即此方へ
御越候委細遂披見候、仍去
十四夜松ヶ嶋へ被取懸、宿
城悉放火其上被及合戦、
始弥大郎其外随一之者共百
余被討捕、首共被差越之
由候、毎度か様之御手柄共無
比類儀可申様無之候、早々至
其表可出馬申候処、此中河
浅候間、諸城手懸依申付
遅延候、方々調略之子細
何も相卜候之間、上洛不可有
程候、殊其国之儀被捨置間敷候
間、可御心安候、弥丈夫被相踏
専一候、尚追々可申入候、恐々謹言、

五月十八日　家康（花押）

木作左衛門佐殿
戸木入道殿

読み

信雄へ御注進状即ち此の方へお越候委細は披見を遂げ候、よって去る十四日夜松ヶ嶋へ取り懸かられ、宿城悉く放火し其の上合戦に及ばれ、弥大郎を始め其の外随一の者ども百余を討ち捕えられ、首ともこれを差し越される由候、毎度か様の御手柄とも比類なきの儀申すべくさまこれなき候、早々その表に至り出馬申すべき候処、この中河浅の間、諸城を手懸け申付くるによって遅延候、方々調略の子細何も相ト（ぼく）し候之間、上洛程あるべからず候、殊其国の儀捨て置かれ間敷く候間、御心やすかるべく候、いよいよ丈夫相踏まれ専一に候、なお追々申し入るべく候、恐々謹言、

五月十八日　家康（花押）

木作左衛門佐殿

戸木入道殿

内容

信雄への報告書がこちらへ届き詳しく読みました。（あなた（木造・戸木）は）去る十四日夜に松ヶ嶋を攻め、宿や城を悉く放火して合戦になり弥大郎を始めとした強者百名余りを捕え首を差出ました。いつもの様のお御手柄とともに比類ないものです。早々にそちら(松ヶ島)へ向かい参陣するところですが、河が浅く諸城を攻撃するよう申し付けていたので（そちらに行くことが）遅れてしまいました。いろいろと調整説得することが決まったので、ほどなく上洛します。そちらの国のことを放置しておくことはしませんので安心して下さい。元気で踏ん張ってしっかりやって下さい。なお追々（そちらへ）言葉をかけます。

木作左衛門佐は織田信雄（のぶかつ）の家老で、戸木城の城主であった木造具政（こづくりともまさ）と考えられます。